

【診療所新時代】

いまこそ 診療所の時代！

第30回

地域を楽しもう

人口減少地区のへき地診療所 における医師としての学び

岐阜県・高山市国保高根診療所長兼高山市役所市民保健部参事・地域医療統括担当

川尻宏昭

はじめに

「診療所新時代 いまこそ診療所の時代！」シリーズに、筆者が勤務している高山市国保高根診療所をテーマとして文章を書かせていただくことに感謝している。一方でこのシリーズの企画趣旨は、「地域の最前線で、地域住民の命を守る活動を展開しながらも、診療生活や地域コミュニティとしての生活を楽しみながら、そして、生きがいを感じながら、積極的に取り組んでいる医師たち、診療所スタッフたちがいることを発信し、第一線の診療所とそこでの生活をプラス志向で受け取ってもらえるような連載」ということのように、それに見合うような現状かどうか……、かなり自信がないというのが本音である。「プラス志向で受け取ってもらえるような」内容にはならないかもしれないということを「はじめに」お伝えしておきたい。

高山市高根町のおかれた状況

高山市高根町は、平成の大合併で高山市と合併した旧大野郡高根村である。日本一広い市域を持つ高山市の南東、乗鞍岳と御岳山に囲まれ、長野県との県境に位置する地区で、高根地区は縄文時代よりその地理的条件から、東西文化交流の仲介点であり交通の要所であった。もう、読者の方の中でも知っている方が少なくなっているのではないかと推測するが、同地区には「女工の道」として広く知られている「野麦峠」があ



写真1 高根診療所

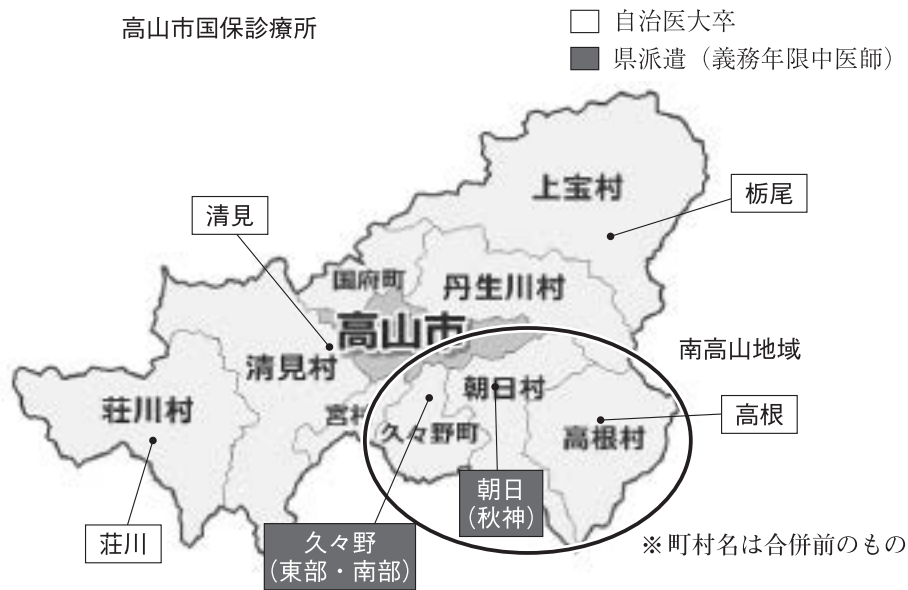
り、また、飛騨と木曾（開田高原）を結ぶ国道が走っている。もっとも県境に位置する集落の一つである野麦集落から市の中心部までは、車で1時間30分程度はかかり、医療のみならず、生活をしていく上でもある意味では厳しい環境と言えるかもしれない。もちろん、コンビニなんてものは高根町には存在しない。合併当時から（平成17年）、すでに同地区の人口は1,000人以下となっていたが、その後も人口減少と少子化は急速に進み、現在の同地区の人口は400名以下、高齢化率は50%を超え、小中学校や保育園は統合または休園になっている。

高山市国保高根診療所について

高山市国保高根診療所（写真1）は2011年に同地区に居住し、まさに24時間に対応してきた「常勤医師が退職する」という事態に直面した。

人口の減少は、患者数の減少につながっており、高

図1 合併後の高山市の市域と南高山地域



山市中心部との交通網も徐々に整備されてきた経過からも、「高根に診療所は必要か」というような意見まで、医師不在を発端に出ることもあったと聞いている。

そのような中で高山市は、「住民が安心できる安定的・継続的な医療の提供」、「住み慣れた地区でのその人らしい生き方をサポートすること」を目標し、市は住民の皆さんとの対話を行いながら、近隣の医療機関や市の他の国保診療所医師の協力を仰ぎ、何とか週3日間の診療体制を確保した。さらに中長期的展望を描くために、「隣接する2地区（朝日、久々野）の国保診療所との協力体制」を強化し、「機能的な一体化」を目指すことで「人口減少地区での安定的医療提供体制（南高山地域医療センター化構想）」（図1、2）を確立していく取り組みを開始し、2013年にその構想をお手伝いするという形で筆者が赴任した。

現在は週3日の医科診療（月、水、木）と半日の歯科診療（水）を継続しつつ、隣接する3地区（久々野、朝日、高根）で医師のグループ化とともに看護師や事務職の共同体化を図ることで、24時間のケアができる体制を築いている。

当地に赴任するまで

筆者は平成6年に徳島大学を卒業後、長野県にある

図2 南高山地域医療センターとは？

■ 3本の柱で南高山地域の医療を守っていく。

- ① 地域に則したきめ細かい医療の提供
- ② 継続性のある安定した医療の提供
- ③ 次世代の医療人の育成

センター化＝
医師・看護師・事務職が3地域を行き来し（共同体化）、3地域全体で医療を幅広く展開（広域化）することで、上記3本の柱を実現していくこと

施設の統廃合ではなく、組織面の再構築で既存施設を運営

佐久総合病院で初期臨床研修、その後の関連診療所勤務、総合診療科での診療や研修医教育を経験した。13年間の佐久での経験後、名古屋大学での教員生活を経て、諏訪中央病院、国立病院機構名古屋医療センター総合内科でそれぞれ約3年の勤務をさせていただき、もともと郷里である高山市へ2013年に戻ってきた。

「地域医療に熱い志をもって！」というような思いは、正直「まったく」と言ってよいほどなく、さまざまな事情から、「そろそろ地元」ということだった。しかしながら、自身の医師としてのこれまでは、臓器別専門医療という領域ではなく、いわゆる今でいうところの「総合診療」や「総合内科」という領域にあたり、また、医師としての第一歩を歩み始めた佐久総合

病院やその後お世話になった諏訪中央病院は、農村や地域という場での医療について向き合ってきた歴史のあるところで、大学や都市部の大病院での経験も含めて、高根診療所での医師としての仕事は、ある意味で「これまで経験させていただいたこと学んだことを集約して実践する」ということに結果的になっていると今は感じている。

高根診療所の今

高根診療所のスタッフは医師1名のほか、看護師が2名、事務職が1名の4名体制である（写真2）。ただし、高根診療所は先述したように隣接する2つの診療所との共同体化（南高山地域医療センター構想）を進めており、スタッフメンバーは常に固定しているわけではない。

私が赴任した以降もそれ以前と比較して、日常に行う医療に大きな変化があったわけではない。ただ、最近、少しずつ患者さんの数が増えているようである。その理由は分析できてはいない。また、看護師のうち、一人は特定行為看護師の資格（創傷管理、輸液管理、感染症管理）を有し、その能力を生かしてくれている。医師という立場で行う医行為ではなく、看護師という立場で行う特定行為の行使は、患者さんの受け取り方もよい意味で違うようである。

最近では、地区の行事にいろいろとお声がけいただけるようになってきた。夏の納涼祭やそれぞれの地区の祭り、また、地元JAとまちづくり協議会が共同で開催した健康講座への参加など、単に医療を提供する診療所という視点ではなく、地域の診療所として、高根地区で少しずつ評価いただけているのかな？ とスタッフ一同、地域の方の温かい気持ちに日々感謝している。今後も、地域の中で「まあ、とりあえず診療所に相談してみようか」と思っただけのようなそんな診療所になりたいとスタッフで話をしている。

診療所における医師としての学びと日々の学びの大切さ

筆者が高根診療所に赴任をして5年目に入った。週



写真2 高根診療所4名のスタッフ

3日のうち2日を自分の診療担当として診療しつつ、2日間は隣接する地区である国保朝日診療所での診療をさせていただいている。また1日は、高山市役所で行政中の医療専門職という立場で、市の医療について行政職とともに仕事をさせていただいている。つまり私自身は、臨床医の立場でプライマリケア・総合診療を中山間地で交通の便が決して良くない地区の診療所での実践をし、また、高山市の行政組織の中では、医療専門職として今後の市の医療体制を市民の皆さんとともに考えるという2足の草鞋を履いている。

この5年で、さまざまな学びを得てきた。臨床医としては、これまでの成人中心から小児の保健医療にも対応することが求められたし、内科学中心から整形外科や皮膚科、耳鼻科、精神科などなど、当たり前のことであるが、患者さんのさまざまな訴えに対して、少なくとも「耳を傾け、相談に乗り、自らが解決あるいは解決する方向を患者さんと一緒に考える」という、プライマリケアや総合診療の最も大切にすべき姿勢とその実践の難しさを学んだ。

また、病気や疾病がその人の生活に密接にかかわっているということも、恥ずかしながら医師25年目にして、単に頭での理解ではなく実感できるようになってきた。80歳になる高齢者が牛を飼い、畑での作物を作り、そして「腰や手や肩や膝が痛い」と診療所に来院される。医学的に言えば「無理な仕事をしているから、それをまずやめてください」と言いたい、あるいは言わなければいけないことかもしれない。

しかし、この土地で長く毎年毎年、季節ごとに「な

すべきこと」を当たり前になし、しっかりと生きてこられた大先輩には、とてもそんなことは言えない。むしろ、「この人が体の痛みや辛さを持ちながらも、変わらず仕事をこなして生きていくためには、何が医者として診療所としてできるのか」と、根本的な治療が難しいとわかっているからこそ、できることは何でもしてあげたいと考えてしまうことが多くなった。同時に医療はやはり主役ではなく、人の生活や人生を支える縁の下の力持ちなのだとも感じている。

とにか、これまでの病院での医療を通して、患者さんから学ぶことももちろん多くあったが、診療所の診療から学ぶこともそれに勝るとも劣らず多くあると感じている。特に少し格好つけて言えば、哲学的であったり文学的であったり、社会的であったりと言ったような医学が人を相手にするからこそ、医学を通して見えてくる、あるいは感じられるさまざまなことを学ばせていただいている気がする。そして、このような臨床の経験からの学びが、市の行政の中での自身が果たす役割についても大きく影響しているし、むしろ、積極的に生かしていきたいと考えている。

診療所にはときどき、医学生や研修医がそれぞれ数日ではあるが来てくれている。「数日の研修で診療所の何がわかるのか」という意見を耳にすることもある。確かに診療所で必要とされる医学的知識や技術を学び修得するには数日では難しい。しかし、医療と社会との関係や医療の果たす役割、医療に対する患者さんの思いや希望などは、おそらくある一瞬の出来事やきっかけで感じることはできるものではないかと思っているし、そういうことを感じたり学んだりする、そんなきっかけになる出来事に会うには、地域の診療所は病院よりも適した場あるいはチャンスが多いのではないかと考えている。

診療所には、このように実習に来てくれた学生や研修医の感想文を看護師さんに頼んで、本人の写真とともに加工してもらい張り出してある。「こんなのは貼っても読んでいない人はいないだろうな」と、自身でお願いして貼ってもらいながらも思っていたが、最近納涼会の時に、ある患者さんから「先生、あれ読んでいるから、これからも張り出してください、若い人が来

てくれて何か感じているなと思うとうれしくなるよ」と声をかけられた。

診療所が単に、医療を提供するところではなく、何かいろいろと発信できる場になるのかもしれないなと少しうれしくなった瞬間であった。

「学び」ということが、私たち医療に携わる人間にとっては、大変重要であるということを改めて自覚するとともに、診療所の日々の中から、「常に何かを学んでいこう」とする姿勢が大切だと、最近はスタッフ間でもその思いを共有することになっている。

おわりに

人口減少少子化というなかなか止められない大きな波の中で、私たちの診療所がある高山市高根町は、それでも「ここで暮らしたい」「ここで最期まで過ごしたい」という気持ちを持つ人の頑張りで何とか維持されている。

診療所のスタッフは、「もしかすると地域がなくなるかもしれない」という厳しい現実の中で、それでも懸命に賢明に、地域の人たちの支えになりたいと願い頑張っている。そして患者さんや地域の方たちからむしろ力をもらい、日々診療に向き合っている。診療所長としては、そんな思いで日々診療に向き合ってくれているスタッフにいつも助けられており、感謝している。

診療所を訪れる若い学生や研修医が、私たちの仕事を見て「プラス志向」で、この仕事を受け取ってくれているのか、それはわからない。しかしながら、「診療所があるから安心」「先生がいてくれるから安心」「看護師さんがいてくれるからありがたい」という言葉は、医療に携わる者にとって何にも代えることができない価値の高い大切なものであり、その言葉が私たちを一步一步「前に」進めてくれる。つまり、私たち自身がそこに生きがいを感じ、プラス志向で日々を過ごしていることは間違いない。

●参考文献

「人口減少地域の医療体制を維持するために」—システムの構築と、それを担う人材の大切さ—川尻宏昭 医学書院雑誌「公衆衛生」第82巻第7号 p565-569